



会長就任の挨拶

社団法人 地盤工学会
会長 石原 研而*

この度由緒ある地盤工学会の会長に御推挙いただき、身に余る光栄であると思っておりますが、同時にその責務の重大さに身の引き締まる思いがしております。

土質工学会（旧称）とのおつきあいは、私が大学を卒業した1957年頃から延々と続いておりまして、多数の諸先輩や同輩、そして後進の方々に随分お世話になりました。当学会とのおつき合い無しには現在の私も在り得なかったと、心から感謝しております。

そもそも学会というのは、起源をたどれば志向や職業を同じくする者が自然に寄り集って出来た集団、つまり“類が友を呼ぶ”の原理にのっとってできた閉鎖的なクラブのようなものであったと思います。お互いに情報を交換し友誼を深めて共栄をはかるとというのが主たる目的であったと考えられます。しかし、これが進化してできなかった現在の学会にはそれ以上のものが期待されています。まず、高度な専門のノウハウを持つまとまった組織体として大きなポテンシャルを具備しているわけですから、必要に応じて学会相応の社会的な貢献をする必要があらうと思います。そのためには地盤工学というものを馴染みやすい形でPRし、一般の人々に関心を持って貰うことが必要です。そして、地盤全体の有効利用技術であるとか、その安全性に関して適切な提言をして行く努力が必要だと思います。

国際学会の名称は Soil Mechanics and Foundation Engineering と呼ばれるのは周知のことですが本学会はこの二つの関連する専門領域で他の分野に見られない特徴ある発展をしてきましたし、今後もそうなることが期待されています。土質力学の分野における変形理論は、主として金属材料を対象として弾性論または塑性論という形で発展してきたわけですが、今ではその主流は土質材料に移り、基本的概念の深化が発展的に生き残れるほとんど唯一の分野は土質力学ではないかと思われます。この応用分野としての地盤工学は環境保全や建設活動に関係した幅広い問題を扱うわけですが、我々の優れた先達は、単なる調査や設計という行為を越えた芸術品にも似た工学体系を創造し、それを遺品として残してくれたと思います。例えば4年毎の国際会議ではいろいろなテーマについて State of the Art (SOA) の報告が行われてきましたが、その中にはユニークで新しい物の考えが脈動していて、読んでいるとつい引き込まれ、ある種の感動を与えてくれるものがあります。これは技術に哲学というか魂のようなものを与えて一つの作品を造り上げるような作業です。基礎工学とか地盤工学は、一種の縁の下の力持ちでして一つの建造物を作るというような明確な目的は持っていません。指針に則して設計し施工が終わって工事費が支払われればそれで完了する、つまり一つの経済的行為で終わってしまうことが多いわけです。しかし、これらの行為に対し、普遍的な考え方を付与し、その定義や位置づけを明らかにし、それを体系化していけば魂の入った一つの学問分野が出来上がるわけです。このような努力は、Terzaghi 以来の優れた先達が特に重視してきたもので、他の専門分野では見られない地盤工学における独特の、しかもすばらしい伝統であると思います。地盤工学は社会の進化に伴い変化していくわけですが、その節目ごとにこのような体系を、いろいろなテーマについて作っていくことが我々に課せられた任務ではないでしょうか。

さて、本学会の運営に関して、過去2年間は、事務組織の再編とか阪神・淡路大震災の調査とか、学会名の変更等々多事多忙な年であったと伺っております。その間、大変な御苦勞をなされた吉見吉昭前会長、落合英俊総務部長をはじめとする各部役員の方々に心から感謝すると共に深い敬意を表したいと思います。私個人は、もとより浅学非才で力不足でございますが、活力に富む会員の皆様の御指導とお力添えを得て、地盤工学会の発展に微力を尽くす心算であります。どうぞよろしく御支援下さいますようお願い申し上げます。

* 東京理科大学教授